

# 平安京左京五条一坊十四町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
二〇〇八―四

平安京左京五条一坊十四町跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所







# 平安京左京五条一坊十四町跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、マンション新築工事にともなう平安京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

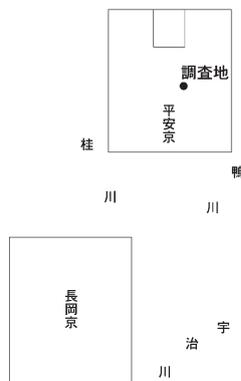
平成 20 年 8 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京五条一坊十四町跡
- 2 調査所在地 京都市下京区大宮通仏光寺下る五坊大宮町 75-1 他
- 3 委 託 者 株式会社新日鉄都市開発関西支店 参与支店長 藤田 武
- 4 調査期間 2008年4月25日～2008年6月4日
- 5 調査面積 約 170 m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 津々池惣一・高橋 潔
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 現場で付けた番号を使用し、遺構の種類を前につけた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 津々池惣一・高橋 潔・能芝 勉
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と周辺調査	2
3. 遺 構	4
(1) 第1面の遺構	4
(2) 第2面の遺構	10
4. 遺 物	13
(1) 安土桃山時代から江戸時代の遺物	13
(2) 平安時代から室町時代の遺物	15
5. ま と め	17

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	第1面全景（北から）
		2	第2面全景（北から）
図版2	遺構	1	SE113（北から）
		2	SD162（西から）
		3	SK117（東から）
		4	SK22（西から）
図版3	遺物	SD162・SE113 出土遺物	

# 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	周辺調査位置図（1：2,500）	2
図3	調査区配置図（1：500）	3
図4	調査前全景	4

図5	調査風景	4
図6	第1面遺構平面図（1：100）	5
図7	第2面遺構平面図（1：100）	6
図8	東壁・南壁断面図（1：100）	7
図9	SX53・SE54 実測図（1：40）	8
図10	SE25・32 実測図（1：40）	8
図11	SE141 実測図（1：40）	9
図12	SE149 実測図（1：40）	9
図13	SK117・22 実測図（1：20）	10
図14	SE113 実測図（1：40）	11
図15	SE113（南から）	11
図16	SD162 実測図（1：40）	11
図17	Pit170 実測図（1：20）	11
図18	安土桃山時代から江戸時代の遺物実測図（1：4）	14
図19	平安時代から室町時代の遺物実測図（1：4）	16

## 表 目 次

表1	周辺調査一覧表	3
表2	遺構概要表	4
表3	遺物概要表	13

# 平安京左京五条一坊十四町跡

## 1. 調査経過

この調査は、(仮称)大宮仏光寺マンション新築工事に伴うものである。調査地は京都市下京区大宮通仏光寺下る五坊大宮町 75-1 他にあたる。

京都市文化財保護課の試掘調査の結果、発掘調査の指導がなされ、当研究所に委託された。調査面積は 170 m<sup>2</sup>である。試掘調査では、安土桃山時代から江戸時代の遺構と平安時代の遺物が検出されており、その成果を踏まえた調査となった。トレンチの設定後、調査は重機掘削から開始し、その後人力による調査を行った。

調査は、安土桃山時代から江戸時代の遺構面を第1面とし、平安時代から室町時代の遺構面を第2面として進めた。それぞれの面で遺構検出・精査・写真撮影・図面記録作成を行った後、埋め戻し等の作業を行い終了した。

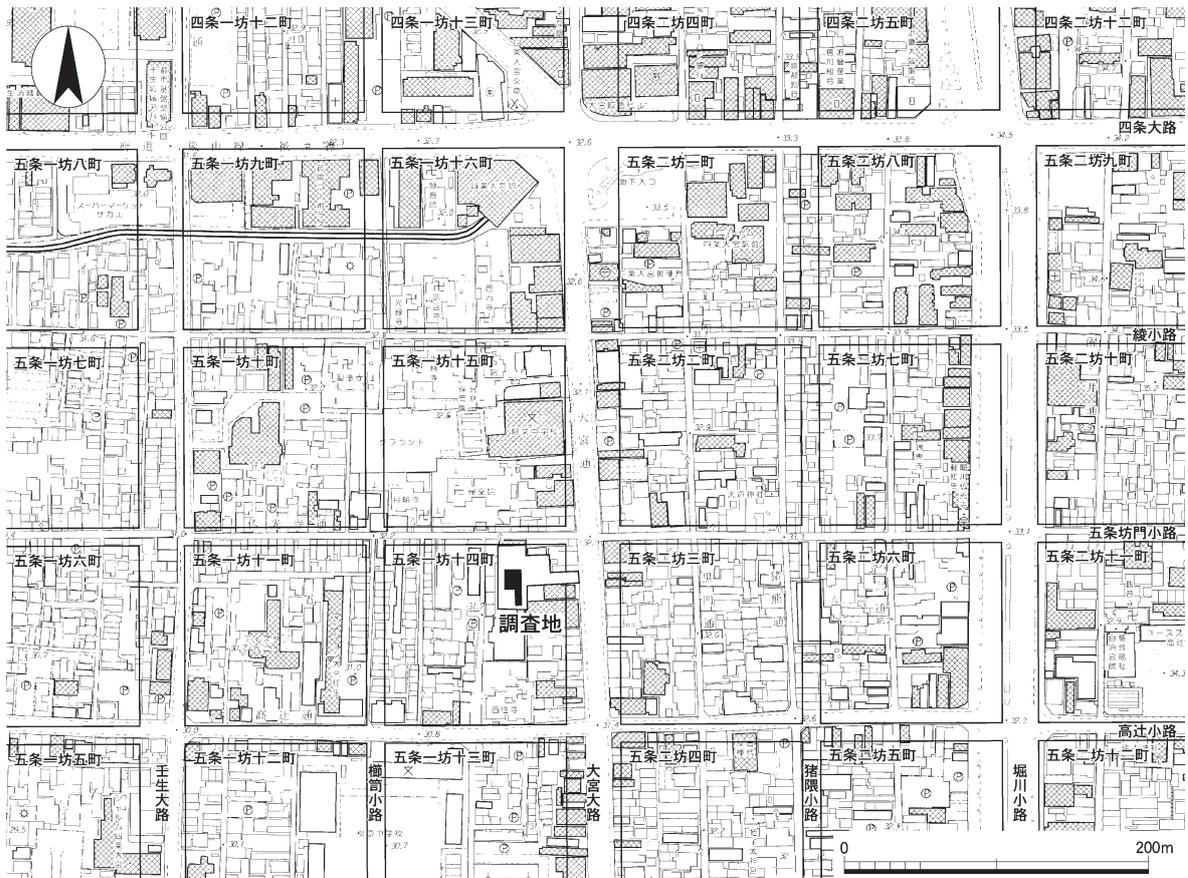


図1 調査位置図 (1 : 5,000)

## 2. 位置と周辺調査

今回の調査地は大宮大路の西 40 m、五条坊門小路の南 20 m の地点である。平安京の条坊では、左京五条一坊十四町の北東部にあたる。その内部を区切る「四行八門制」では、ほぼ西三行と北二門の範囲の一部である。

鎌倉時代に作成された『拾芥抄』収録の「東京図」では、本文記述と記載齟齬があるものの、十四町を「後院地」の一部としている<sup>1)</sup>。

これまでの十四町内での発掘調査事例はなく、立会調査のみである。周辺調査図(図2)と表(表1)は、十四町内の立会調査とその周辺の発掘調査を示した。それによると、調査地の北東(調査地点6)では江戸時代の遺構が検出されている。調査地の東(調査地点10)では室町時代のものを含めて3基の土坑が検出されている。調査地の西(調査地点11)では江戸時代前期の包含層、室町時代の包含層、鎌倉時代後期の落ち込み東肩(幅0.8 m以上、深さ0.25 m)が検出されている。調査地の南西(調査地点12)では江戸時代前期の遺物包含層、安土桃山時代から江戸時代の南北溝、室町時代中期の包含層が検出されている。調査地の南東(調査地点8)では江戸時代の土坑が検出されている。調査地の南、町内の南端付近、現在の高辻通(調査地点4)では平安時代前期の高辻小路北側溝が検出されている。また、十五町内であるが、調査地北側約100 mの発掘調査(調査地点7)では室町時代の土取り坑と平安時代末期の井戸3基が検出されている。

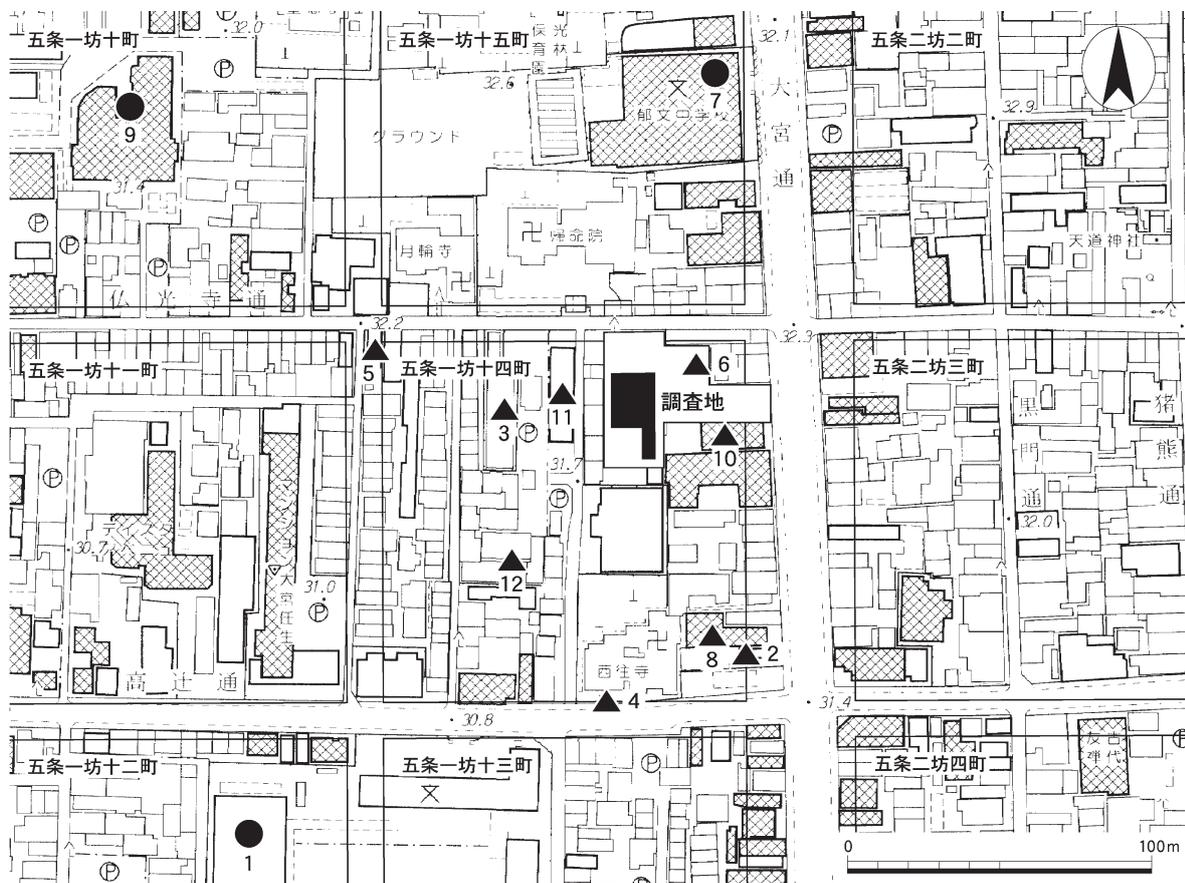


図2 周辺調査位置図 (1 : 2,500)

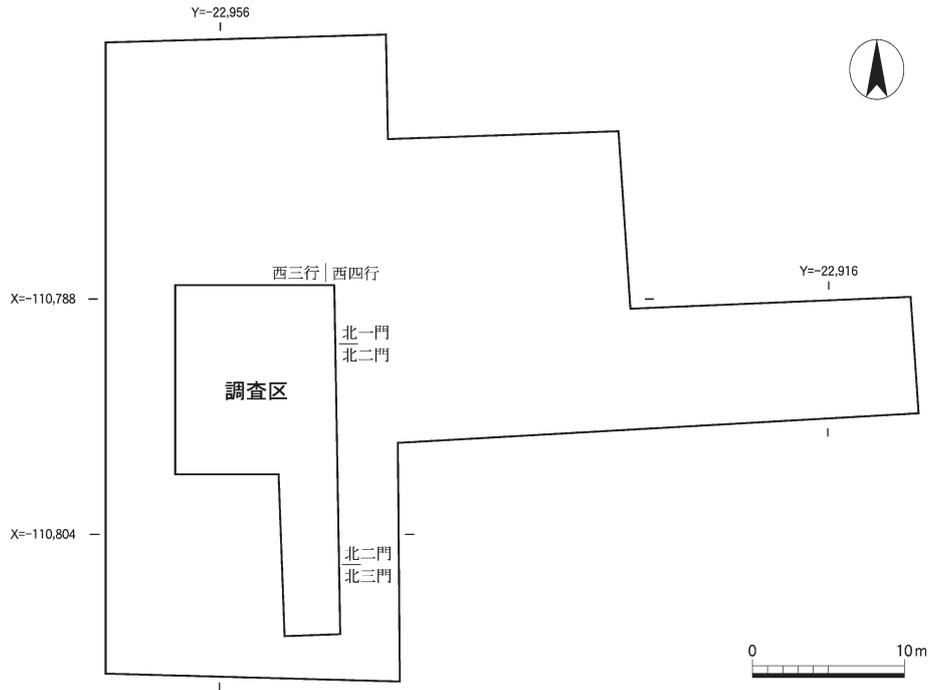


図3 調査区配置図（1：500）

表1 周辺調査一覧表

調査地点	年度	遺跡名	調査法	主な遺構	文献
1	1978	五条一坊十二町	発掘	平安時代の井戸2基、平安時代～中世のピット5基、土坑4基ほか	
2	1979	五条一坊十四町	立会	なし	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課
3	1981	五条一坊十四町	立会	盛土のみ	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報』昭和56年度 京都市文化観光局
4	1982	五条一坊十四町	立会	高辻小路北側溝ほか	『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所
5	1983	五条一坊十四町	立会	江戸時代の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度 京都市文化観光局
6	1984	五条一坊十四町	立会	江戸時代の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局
7	1987	五条一坊十五町	発掘	平安時代の井戸3基ほか	『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所
8	1987	五条一坊十四町	立会	江戸時代の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度 京都市文化観光局
9	1988	五条一坊十町	発掘	平安時代の井戸・ピット群ほか	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所
10	1989	五条一坊十四町	立会	室町時代の土坑ほか	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度 京都市文化観光局
11	2000	五条一坊十四町	立会	室町時代の包含層ほか	『京都市内遺跡立会調査概報』平成12年度 京都市文化市民局
12	2006	五条一坊十四町	立会	江戸時代の包含層ほか	『京都市内遺跡立会調査概報』平成19年度 京都市文化市民局



図4 調査前全景



図5 調査風景

### 3. 遺 構

調査地の基本層序については、表土下 1.0 m 前後までは、ほぼ全域において染物工場に伴う施設跡や廃材などが混じる現代層である。部分的には、さらに深く攪乱がおよぶ。そのため、遺構は掘り込みの深い井戸や土坑を中心として残存している。その下は、にぶい黄褐色シルトの地山面となる。検出した遺構は、平安時代から江戸時代までのものがあるが、全て地山面で検出した。調査の手順上、これらを安土桃山時代から江戸時代（第 1 面）と平安時代から室町時代（第 2 面）にわけて実施した。検出した遺構総数は 171 基である。遺構のほとんどはゴミ穴と井戸である。以下に、検出した遺構について、その概略を述べる。

#### (1) 第 1 面の遺構（図 6、図版 1-1）

SX53（図 9）掘形はいびつな円形で、直径 1.4 m、深さは 1.2 m である。井筒の内径は 0.7 m である。井筒に桶状のものを設置した箍の痕跡が 3 段認められる。当初井戸と考えたが、掘削が湧水層まで達していないので、トイレなど別の施設を検討したい。出土遺物から 18 世紀末～19 世紀前半のものである。

SE54（図 9）掘形は円形で、直径 1.2 m、深さは 1.8 m 以上である。狭いため完掘できなかった。掘削面までは井筒施設は認められなかった。1.0 m 下から掘削面までは瓦のみを投棄している。出土遺物から、天明の大火（1778 年）以降から 19 世紀に入る遺構と考えられる。

SE32（図 10）掘形は直径 1.6 m で、深さは 2.1 m 以上である。埋土が緩く安全上完掘はできなかつ

表 2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
安土桃山時代 ～江戸時代	SX53、SE54、SE32、SE25、SK41、SE141	
平安時代 ～室町時代	SE149、SK117、SK161、SK169、SK22 SE113、SD162、Pit170	SD162は北一門・二門と北二門・三門の中間的な位置にある

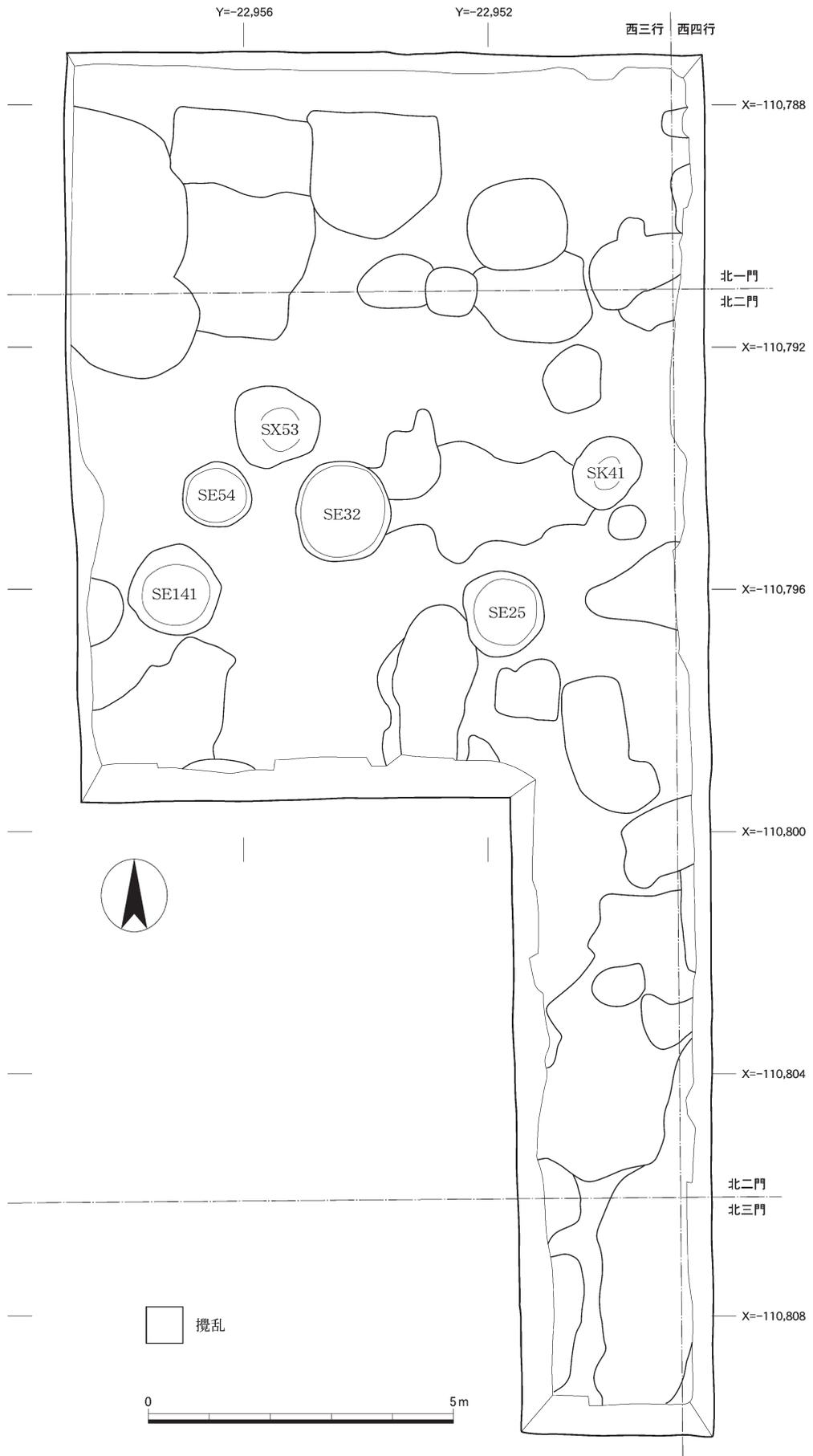


图6 第1面遺構平面図(1:100)

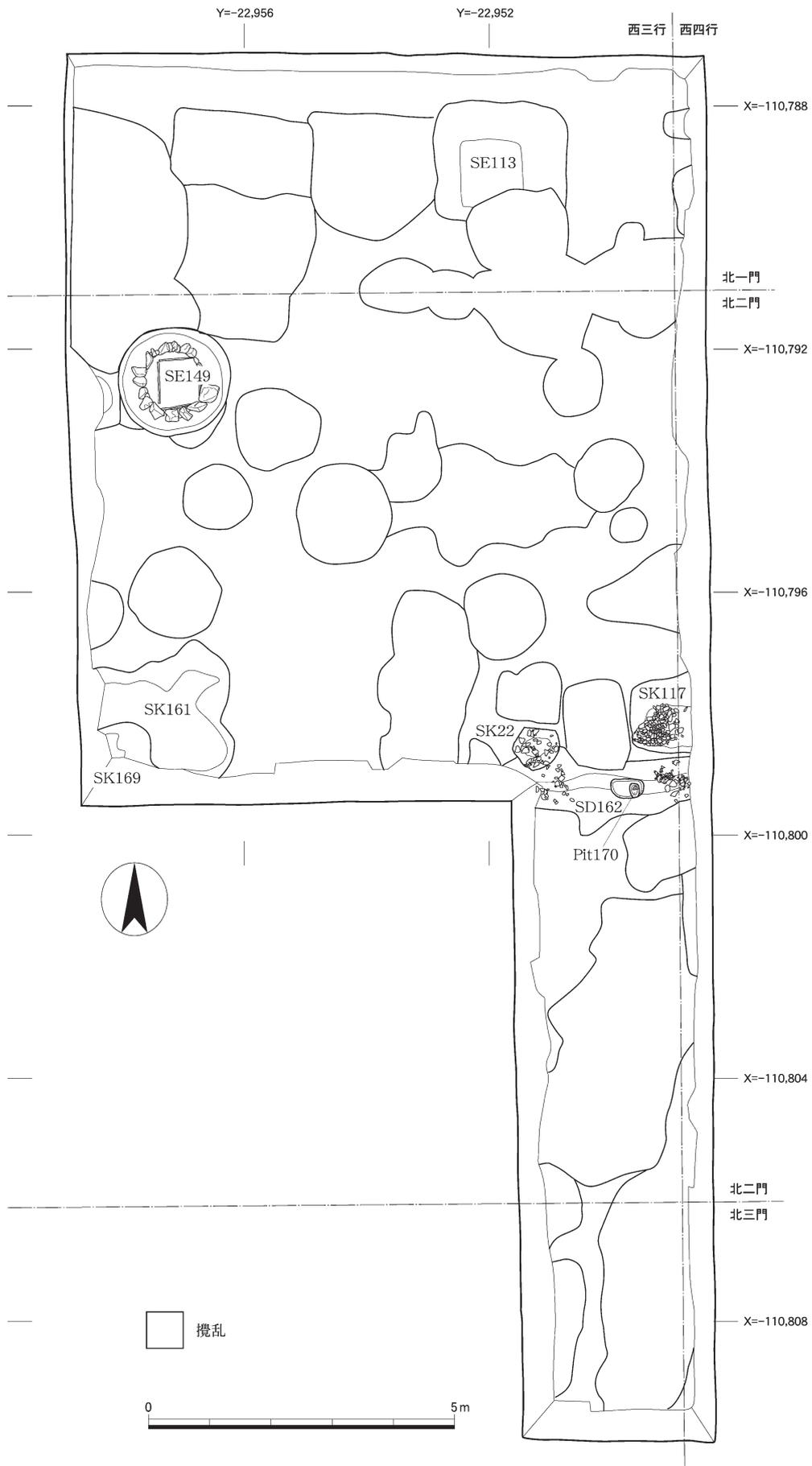
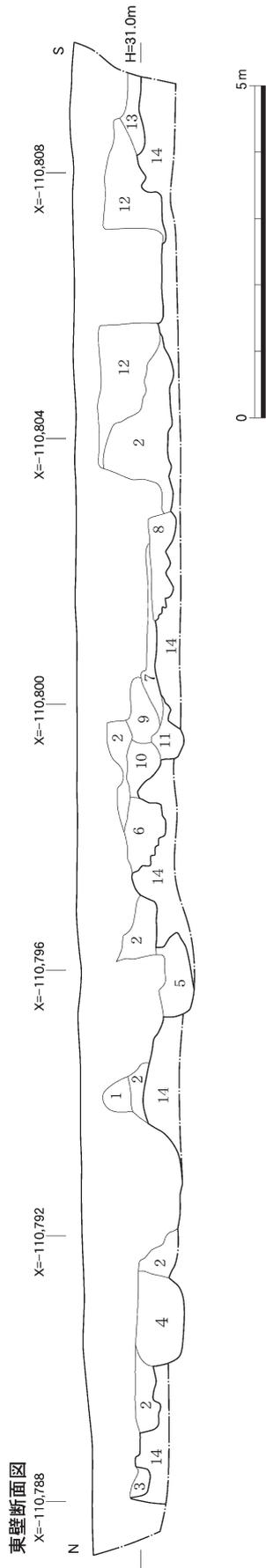


图7 第2面遺構平面图 (1:100)



- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 炭斑点状に少量含む
- 2 10YR5/2灰黄褐色砂泥 遺物少量混じる
- 3 10YR3/1褐色砂泥 砂礫混じる
- 4 10YR2/3黒褐色泥土 炭全体混じる 泥土ブロック混じる
- 5 2.5Y3/1黒褐色泥土 土器混じる φ3~4cmの礫混じる (SK7)
- 6 10YR2/3黒褐色砂泥 土器微量混じる (SK117)
- 7 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (SK128)
- 8 10YR2/2黒褐色砂泥 (SK129)
- 9 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 10 10YR4/2灰黄褐色砂泥 土器微量混じる (SD162)
- 11 10YR2/2黒褐色砂泥 約φ1cmの礫混じる (SK171)
- 12 10YR2/3黒褐色砂泥 φ3~4cmの礫含む (SK100)
- 13 10YR4/2灰黄褐色砂泥 炭斑点状に少量含む
- 14 10YR5/3にぶい黄褐色シルト (地山)

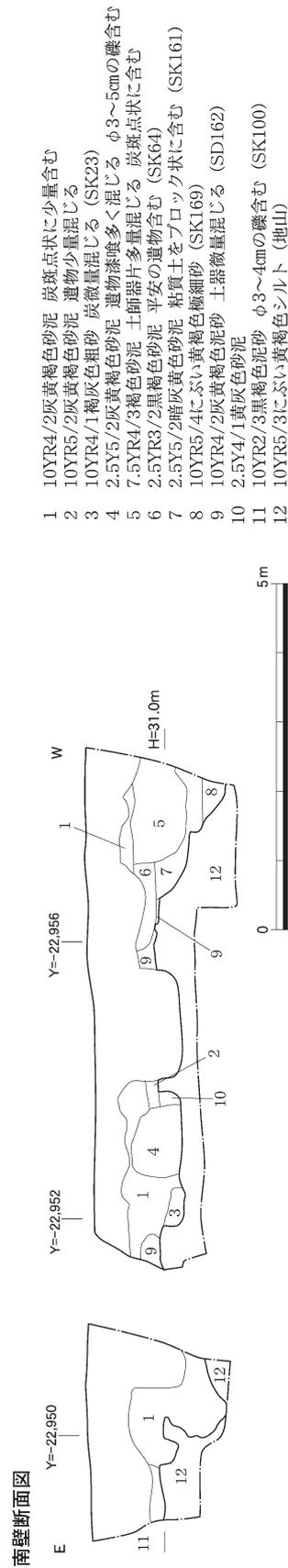


図8 東壁・南壁断面図 (1:100)

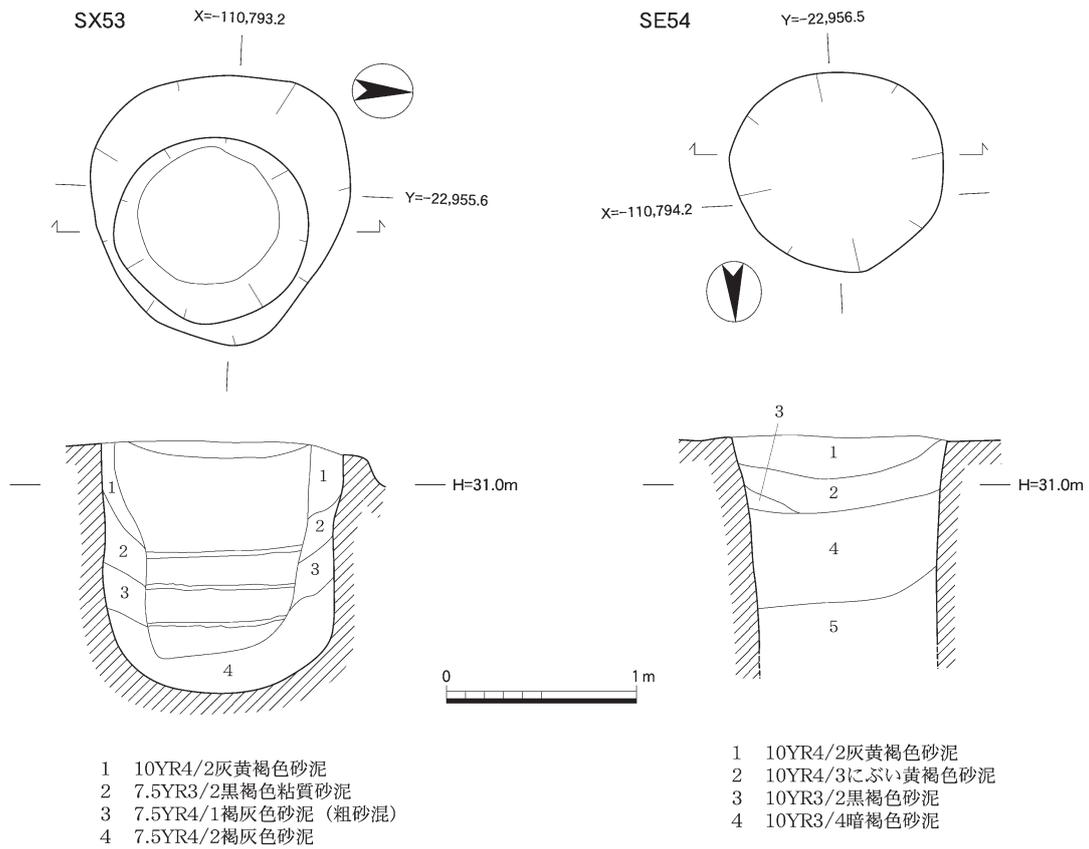


図9 SX53・SE54 実測図 (1:40)

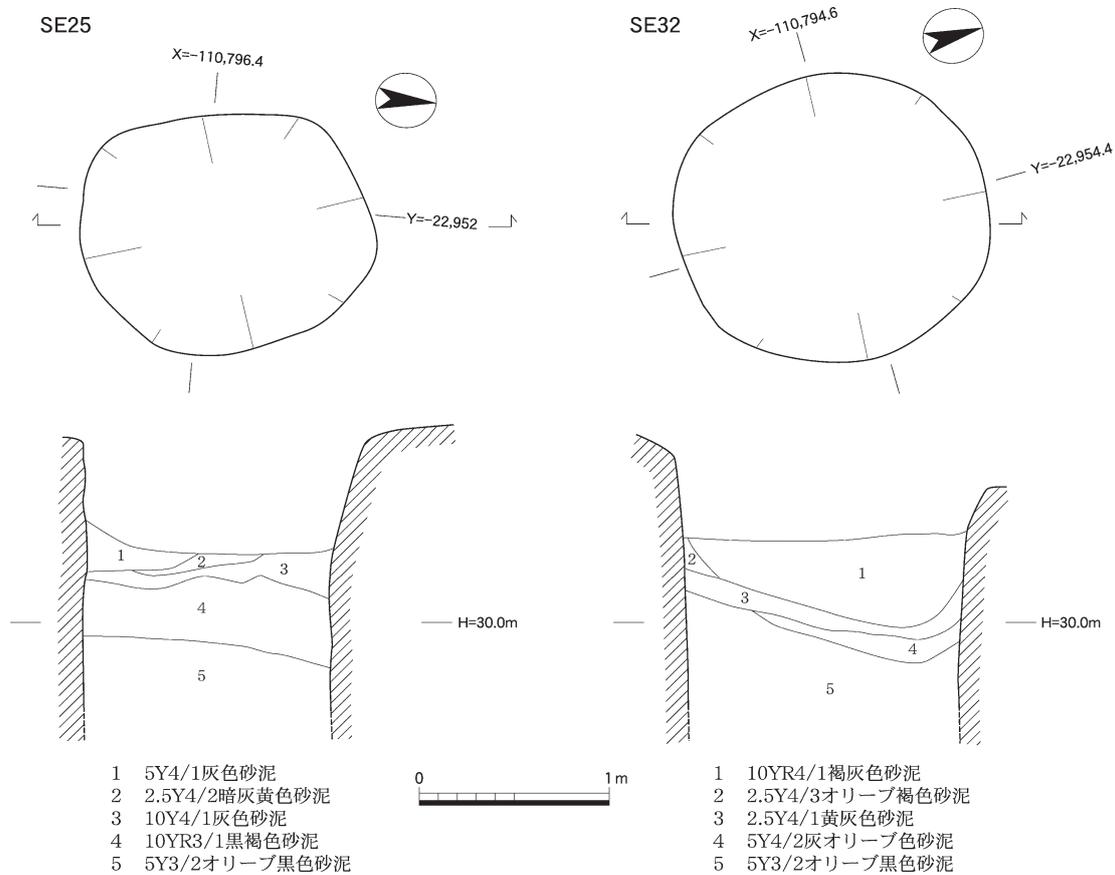
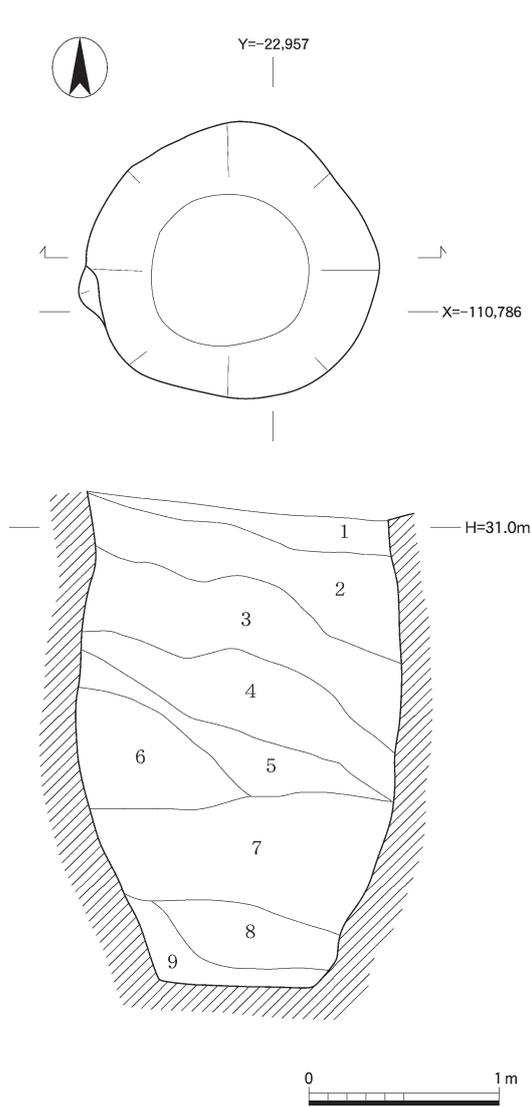


図10 SE25・32 実測図 (1:40)

た。掘削面までは井筒施設は認められなかった。粘土質の土で埋めている。出土遺物から 18 世紀前半～中葉までに廃絶している。

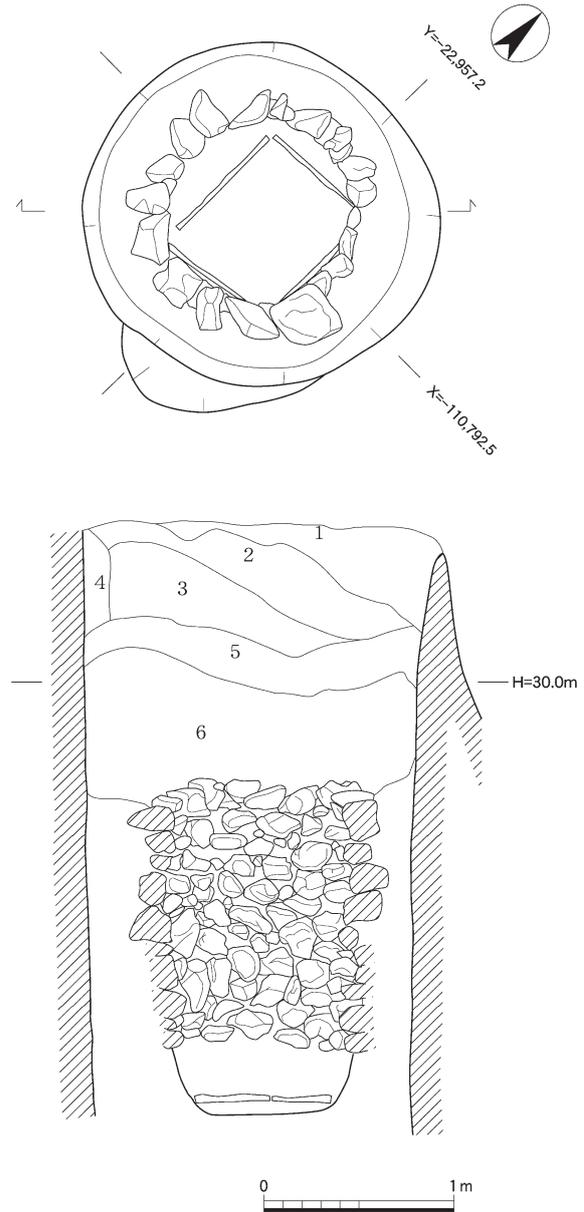
SE25(図 10) 掘形の直径は 1.4 m で、深さは 2.0 m 以上である。埋土が緩く安全上完掘できなかった。掘削面までは井筒施設は認められなかった。遺物は少なく、粘土質の土で埋めている。出土遺物から 17 世紀中葉～後半にかけて廃絶している。

SE141 (図 11) 掘形は直径 1.6 m で、深さは 2.1 m である。底部まで井筒施設は認められなかった。埋める際に抜き取ったと思われる。出土遺物から 16 世紀後半に廃絶されている。



- 1 2.5YR3/2黒褐色砂泥
- 2 10YR4/4褐色砂泥
- 3 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
- 5 5Y4/2灰オリーブ砂泥
- 6 5Y3/2オリーブ黒砂泥
- 7 2.5YR3/2黒褐色砂泥 (φ10～50mm礫)
- 8 5Y3/2オリーブ黒砂泥
- 9 2.5YR3/3暗オリーブ褐色砂泥 (φ10～50mm礫)

図 11 SE141 実測図 (1 : 40)



- 1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
- 3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂
- 4 2.5Y2/3黒褐色粘質砂泥
- 5 2.5Y2/3黒褐色泥砂
- 6 10YR3/2黒褐色泥砂 (φ30～50mm礫)

図 12 SE149 実測図 (1 : 40)

SK41 規模は径 1.2 mを測る円形の土坑である。深さは検出面から 0.2 mと浅い。底部付近は炭化物層となっており、ゴミ処理施設だったと思われる。出土遺物から 16 世紀後半代の遺構である。

## (2) 第 2 面の遺構 (図 7、図版 1 - 2)

SK161 南北 2.3 m以上、東西 1.8 m以上の土坑である。焼土混じりの土層の上面に地山の土をかぶせた状態で検出した。火災跡などを整地をしたものと思われる。出土遺物から 15 世紀前半～後半のものである。

SK169 南北 1.6 m以上、東西 0.8 m以上である。SK161 の直下の土坑である。焼土が混じるものであり、SK161 の起伏の一部の可能性ある。時期も SK161 とほぼ同時期である。

SK117 (図 13、図版 2 - 3) 南北 0.9 m、東西 0.8 m以上で、瓦や土器を 4～5 cmに砕いた状態で集積している。遺構の性格は不明である。出土遺物から 15 世紀前半～後半のものである。

SE149 (図 12) 掘形は円形で直径 1.8 m、深さは 3.0 mである。石組みが検出面から深さ 1.2 mより下に残る。内径は 0.8 mである。底部には 0.8 m四方の木枠の痕跡がわずかに残る。出土遺物から 15 世紀前後に廃絶している。

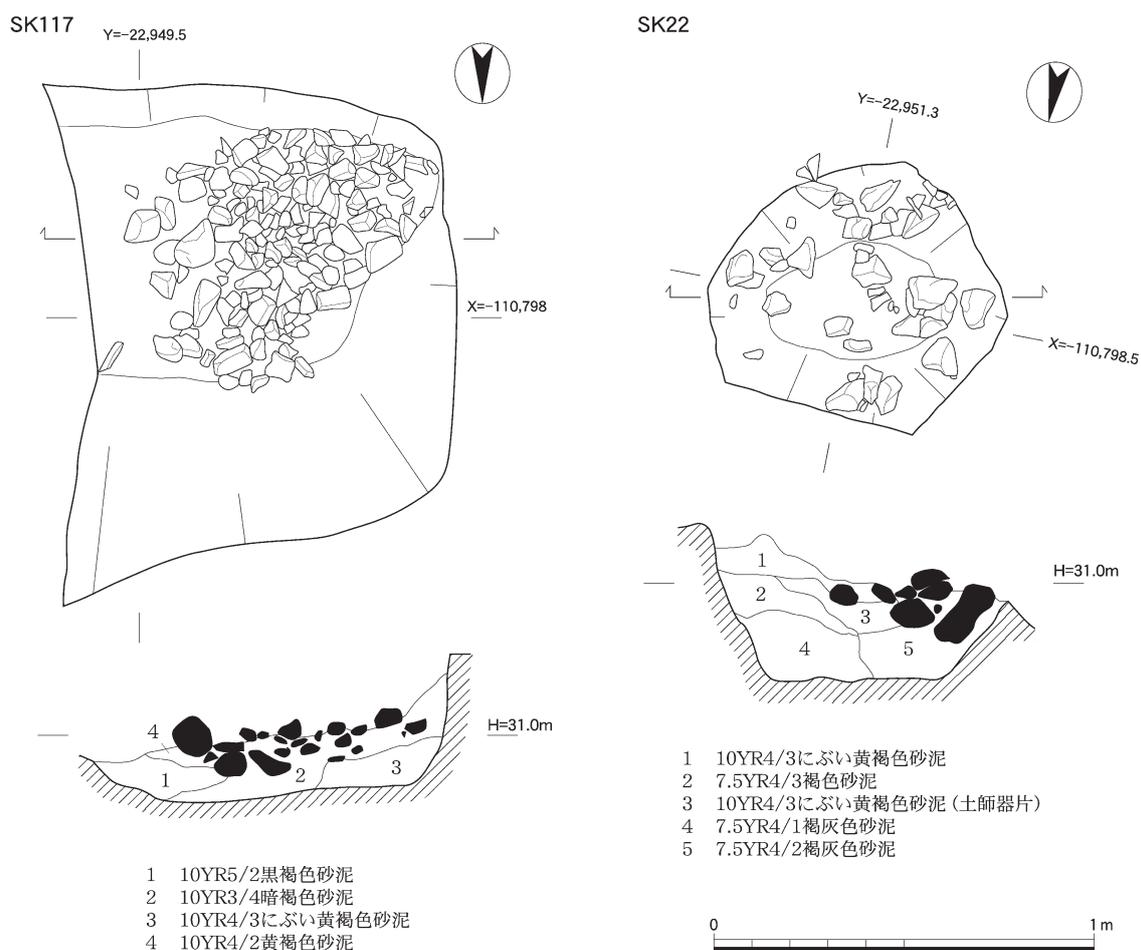
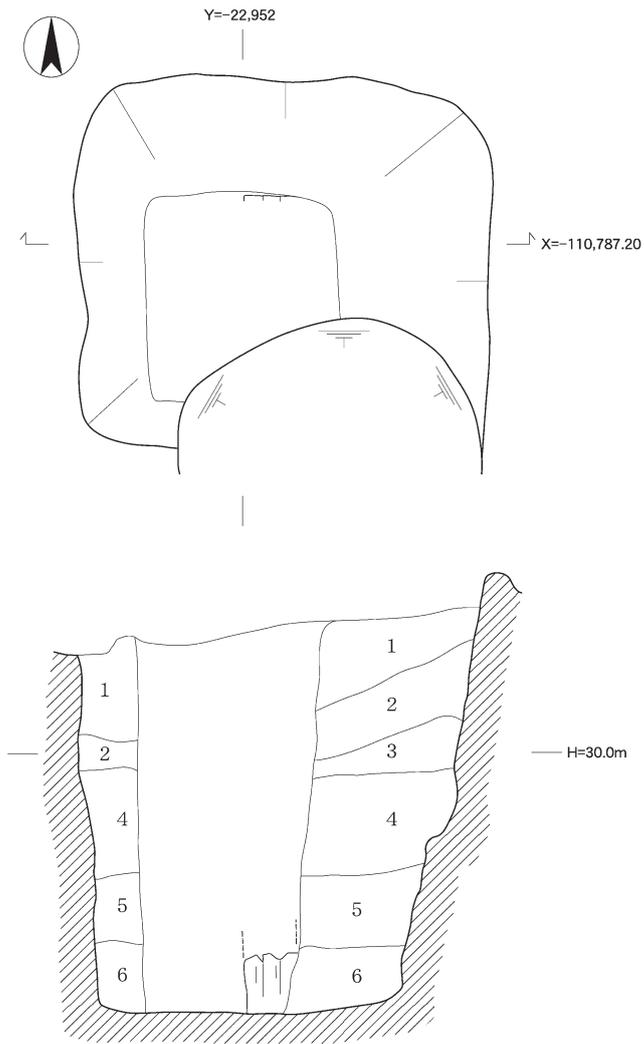


図 13 SK117・22 実測図 (1 : 20)

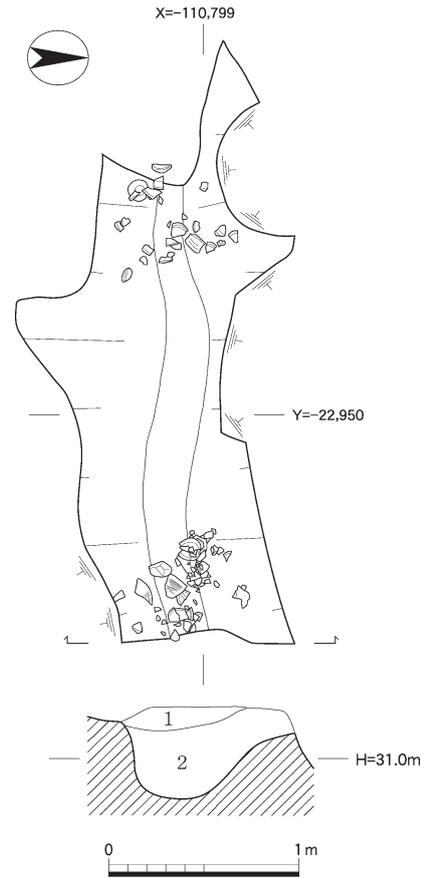


- 1 10YR4/1 褐灰色砂泥 (φ50mm 礫)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- 3 10YR4/1 褐灰色粘質土
- 4 10YR2/3 黒褐色粘質土
- 5 10YR4/1 褐灰色砂泥
- 6 10YR4/2 灰黄褐色砂泥

図 14 SE113 実測図 (1 : 40)

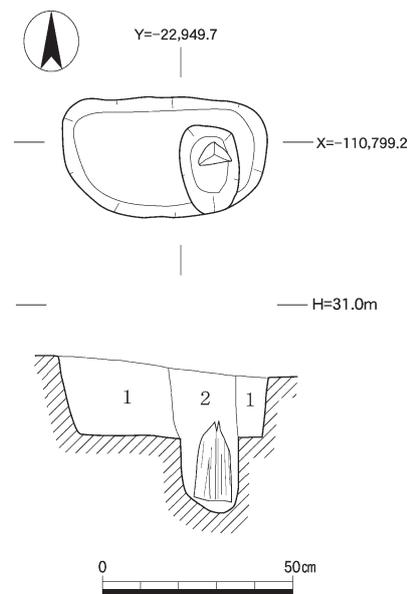


図 15 SE113 (南から)



- 1 10YR3/3 暗褐色泥砂
- 2 10YR4/2 灰黄褐色泥砂

図 16 SD162 実測図 (1 : 40)



- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土

図 17 Pit170 実測図 (1 : 20)

SK22 (図 13、図版 2- 4) 径 0.8 m の円形に近いものである。拳大の石を集積している。出土遺物から 14 世紀後半代である。

SE113 (図 14・15、図版 2- 1) 掘形は南北 2.0 m、東西 2.3 m の隅丸方形で、井戸枠は一辺が 1.3 m の方形縦板組と考えられるが歪んでいる。また、井戸枠は掘形の中央からずれている。井戸枠の木材は底部に縦板の破片がわずかに残るが、痕跡は東側の一部を除いて明瞭である。深さは検出面から 2.4 m である。井戸枠内と掘形の遺物は、ほぼ同時期であり、造られてから時間を長く隔てることなく廃絶したと思われる。12 世紀の後半代を示す。

SD162 (図 16、図版 2- 2) 調査地中央で東西に検出した。長さ 3.0 m で、幅は 1.0 m である。深さは 0.5 m を測る。出土遺物から 10 世紀後半に廃絶している。

Pit170 (図 17) SD162 の下から検出した。掘形は長径 0.5 m、短径 0.3 m で、深さは 0.2 m である。柱当たりは長径 0.4 m、短径 0.3 m で、深さは 0.4 m である。長さ 0.2 m の柱根が残っていた。出土した遺物からは、SD162 の遺物と時期差はなく、廃絶してすぐに溝が造られたと考えられる。

## 4. 遺 物

遺物は土器・瓦類が56箱出土した。ほとんどが井戸の埋土に伴う土器・陶磁器類である。

### (1) 安土桃山時代から江戸時代の遺物 (図18)

SE141 出土遺物 土師器皿には皿Sb(1・2)、皿S(3・4)がある。皿Sbは口径8.8～9.2cm、高さ1.6～2.0cmである。皿Sは口径10.4～12.0cmのものである。X期中・新<sup>2)</sup>に収まる。

SE25 出土遺物 土師器には皿S(5)がある。口径10.8cm、高さ2.0cmである。XI期中・新に収まる。肥前系磁器には高台径が小さく、高台内施釉の初期伊万里皿(6)がある。陶器には瀬戸・美濃系の御深井釉壺(7)、肥前系鉄釉陶器鉢(8)、播目が6本単位の丹波播鉢(9)がある。XI期新までの一群である。

SE32 出土遺物 土師器には皿Nr(10・11)、皿S(12～14)がある。皿Nrは口径5.2～5.6cm、高さ1.2cmの小型である。皿Sは口径9.4～11.2cm、高さは推定1.6～2.0cmである。見込みに定型化した圏線をもつ。土師質の小型鉢(15)はいわゆるデンボである。また、火入れ(16)がある。陶器には、軟質で鉛釉を施した灯明皿(17)がある。肥前系磁器には手描き草花文とコンニャク印判をあしらったいわゆるくらわんか手の粗製椀(18)、高台内無釉で見込みに蛇ノ目状釉剥ぎの皿(21)、雨降らし文椀(19)や松葉文にコンニャク印判を添えた椀(20)、内面無釉の鉄釉青磁の脚付き香炉(22)と思われるものもある。また、肥前系の京焼風陶器椀(23・24)、見込み蛇ノ目状釉剥ぎの刷毛目椀(26)、外に波状の刷毛目、内に打刷毛目を施す小杉椀(25)などがある。他には、瀬戸・美濃系の茶入れ(27)、備前の灯明皿(28)がある。XII期新の様相を示す。

SX53 出土遺物 肥前系磁器には、青磁染付の筒型椀(29)、見込み蛇ノ目状釉剥ぎで高台内無釉の皿(30)、貝文様をあしらう染付の段重(31)があり、期後半の様相を示す。

SE54 出土遺物 土師器は小型の皿Nr(32)がある。土師質土器の小鉢で、いわゆるデンボ(33)がある。土製品では泥面子(34・35)がある。肥前系磁器には見込み蛇ノ目状釉剥ぎの皿(38)、体部が内傾し、外面に竹と岩をあしらう筒型椀(37)がある。また、草花をあしらう仏飯器(36)

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
安土桃山時代 ～江戸時代	土師器、土製品、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器		土師器11点、土師質土器5点、施釉陶器6点、焼締陶器2点、磁器14点、輸入陶磁器1点	9箱	36箱
平安時代 ～室町時代	土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器		土師器28点、白土器2点、黒色土器4点、灰釉陶器1点、緑釉陶器2点、瓦器2点、焼締陶器1点、輸入陶磁器6点	11箱	0箱
合 計		58箱	85点(2箱)	20箱	36箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

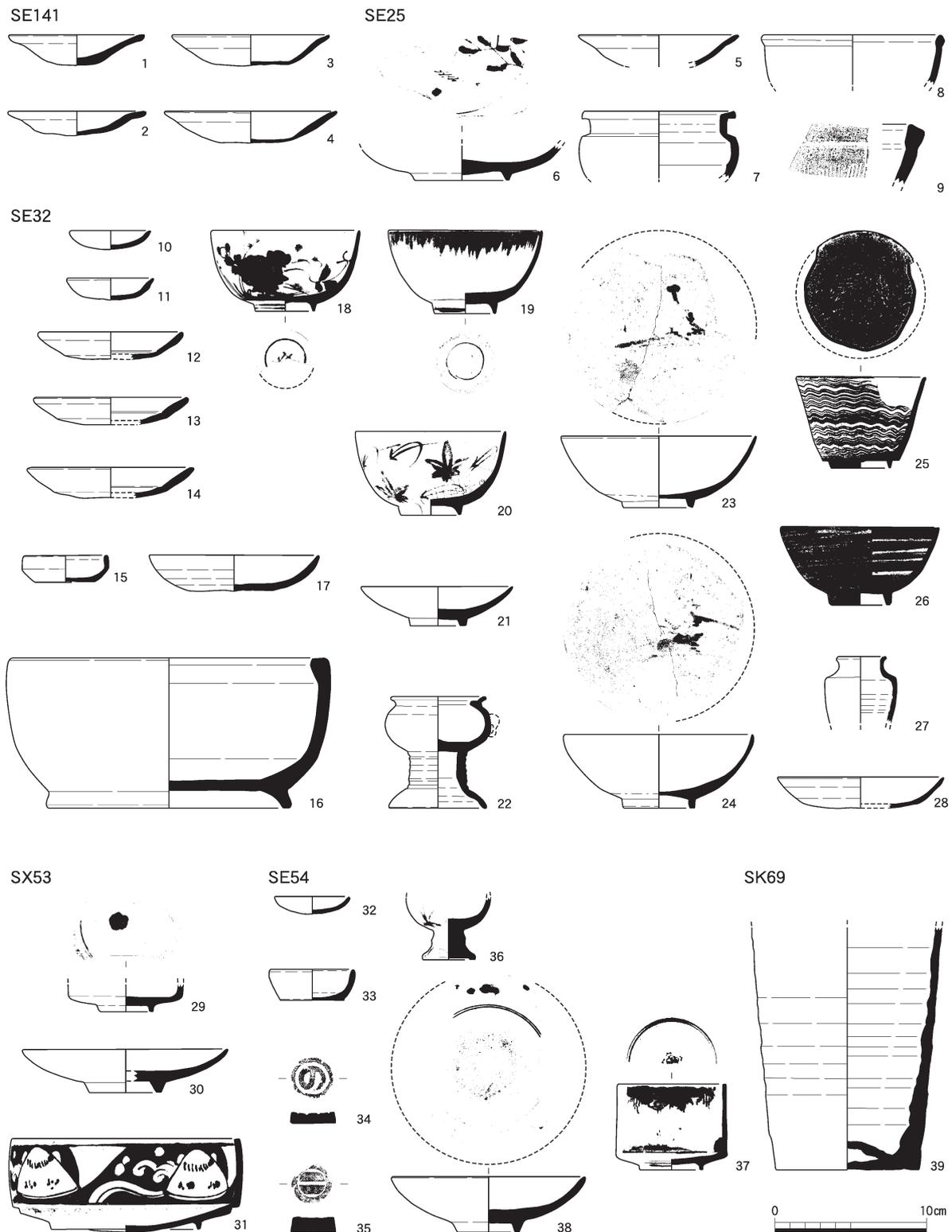


図 18 安土桃山時代から江戸時代の遺物実測図（1：4）

がある。期末葉の様相を示す。

SK69 出土遺物 性格不明な SK69 からベトナム産長胴瓶（39）が出土している。江戸時代初頭頃を示す。

## (2) 平安時代から室町時代の遺物 (図 19、図版 3)

SD162 出土遺物 土師器には皿 A (40～43)、皿 L (44～47)、高杯 (57) がある。皿 A は、口径 12.4～12.8 cm、高さ 2.0 cm に収まる。皿 L には口径 14.4 cm、高さ 1.2～1.6 cm の一群と口径 16.8 cm、高さ 2.8 cm のものがある。口縁部が屈曲し端部を丸くおさめる。高杯は杯部と脚部の大部分が欠けている。軸部は太さ 4.4 cm を測る。軸部は縦方向のケズリとナデを施す。白色土器には椀 (48) がある。体部下段以下をケズリ、底部は削り出し高台とする。内面はナデを施す。黒色土器には椀 (49・50)、甕 (51)、風字硯 (52) がある。椀 (49・50) は内面のみを黒色化させる。内面をミガキ、椀 (50) は外面にケズリを加える。甕 (51) は、口縁部内面ハケメ調整、体部内面横方向のナデを施す。風字硯 (52) は両面にミガキを施す。灰釉陶器には椀 (53) がある。やや外に開く高台を貼り付ける。施釉は漬け掛けとしている。緑釉陶器には皿 (54)、椀 (55) がある。皿 (54) は高台を貼り付けている。高台内以外を施釉する。近江産である。椀 (55) は高台を貼り付け、見込み部分に浅い沈線を巡らし輪花を配する。内面 2 箇所目痕がある。近江産と思われる。輸入青磁には鉢 (56) がある。高台は平底で、6 弁の輪花を施す。底部に目痕が付く。越州窯系である。Ⅲ期中に収まる。

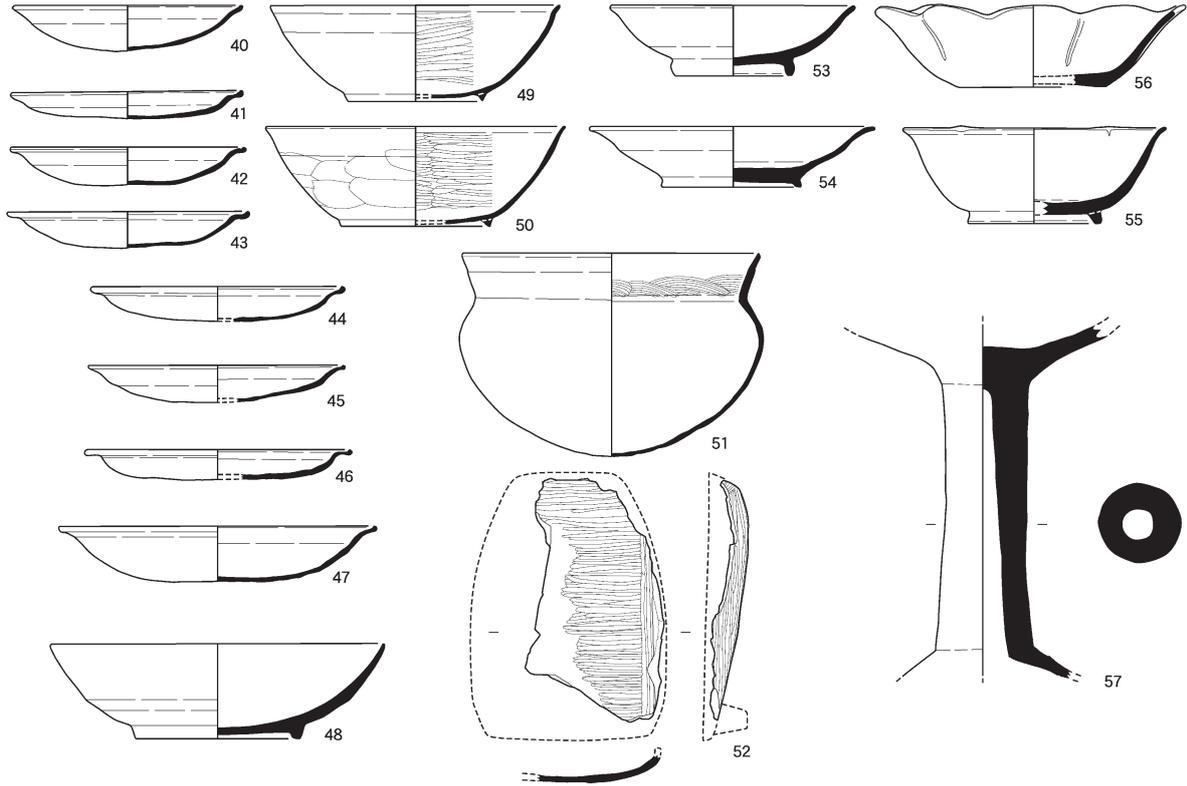
SE113 出土遺物 土師器には皿 N の小 (58～61) と大 (62～64)、高杯 (67・68) がある。皿 N 小は口径 9.1～10.0 cm、高さ 1.5～1.8 cm である。皿 N 大は口径 14.5～15.3 cm、高さ 2.8～3.3 cm である。いずれも、口縁端部の立ち上がりが内傾する。外側に 2 段のナデを施す。高杯 (67・68) はいずれも軸部のみである。粗い縦の面取りが入る。白色土器には皿 (65) がある。底部を糸切りしている。内面は磨滅し調整は不明である。瓦器には椀 (66) がある。内面に粗い暗文を施す。輸入白磁には椀 (69・70) がある。(69) は玉縁の口縁および体部、(70) は高台部露胎の底部である。ほかには東播系の須恵器鉢 (71) がある。Ⅴ期新に収まる。

SE149 出土遺物 土師器皿には皿 N (72・73) で口径 8.8～11.1 cm、高さ 1.9～2.4 cm のものと白色系の皿 S (74・75) で口径 12.0～13.0 cm、高さ 2.5～3.5 cm のものがある。瓦器には羽釜 (76) がある。輸入白磁には椀 (77・78) がある。いずれも高台内無釉のものである。Ⅷ期中に収まる。

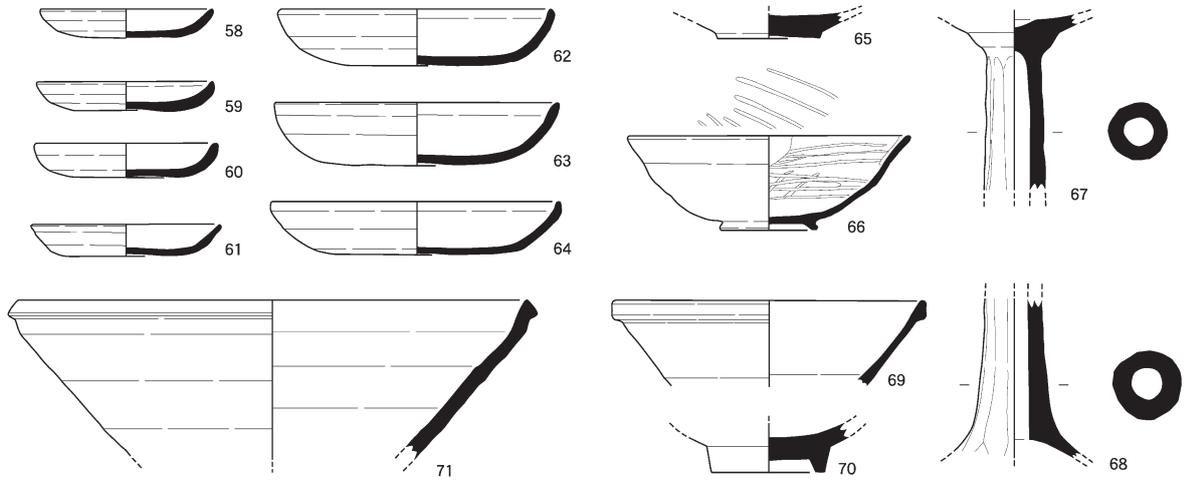
SK117 出土遺物 土師器皿には皿 N (79) で口径 10.0 cm、高さ 1.5 cm のものと皿 S (80・81) で口径 12.0～13.6 cm、高さ 3.0～3.1 cm のものがある。皿 S (80) は新しい様相を示す。輸入白磁には椀 (82) があるが、前代の混入である。Ⅷ期中～Ⅸ期古の様相を示す。

SK161 出土遺物 土師器皿には皿 N (83・84) で口径 9.4～11.0 cm、高さ 2.0 cm のものと、皿 S (85) で口径 12.0 cm、高さ 3.0 cm のものがある。その他東播系の須恵器鉢、輸入白磁椀などがあるが小片である。Ⅷ期新～Ⅸ期古の様相を示す。

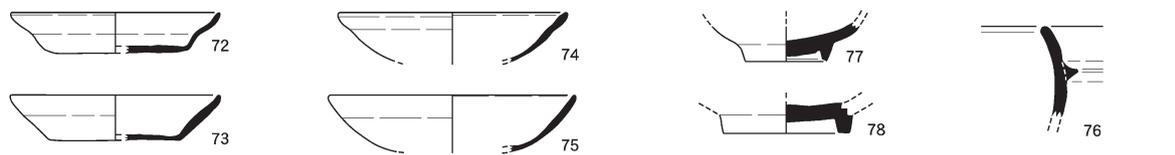
SD162



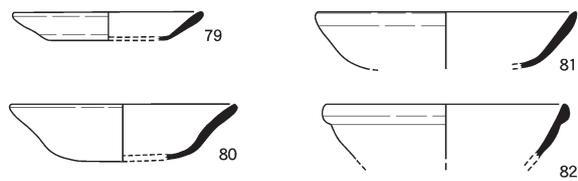
SE113



SE149



SK117



SK161

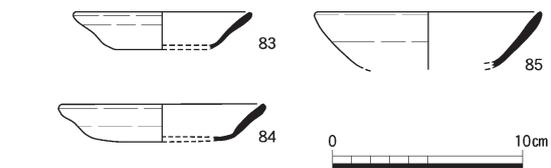


図 19 平安時代から室町時代の遺物実測図 (1 : 4)

## 5. ま と め

調査地は井戸が複数あり、北側の都文中学校構内の調査でも平安時代末期の井戸が3基検出されている<sup>3)</sup>。平安時代からこの付近の水脈が知られていたものと思われる。地権者の話では昭和30年頃まで染物工場が操業しており、それに伴う井戸もあったという。また、付近には現在も染物工場があり、近世においても関連する生業があったと思われる。

平安時代の溝が検出され、多くの遺物が出土した。SD162は五条坊門小路南築地推定ラインの南23.5mにあたり、北一門・二門と北二門・三門のほぼ中間に位置しており、何らかの南北区画溝の可能性がある。当地の十四町内では立会調査以外は行われておらず、また、文献史料からは『後院地』についての記載があるが、文献に直接関連する遺構や遺物は検出し得てないので、今後の課題としたい。

### 註

- 1) 『拾芥抄』の「東京図」には「後院」と記載されているところは2箇所ある。そのうち1箇所は五条一坊十三・十四町および同二坊三・四町を「後院地」としている。ところが、同書本文では「後院四ノ町 五条ノ坊門南五條北 大宮東堀川西」としている。この地は、五条二坊三～六町にあたり、齟齬があり十四町を「後院地」とは断定しがたい。  
禁祕抄考註・拾芥抄『改定増補 故実叢書』22巻 故実叢書編集部 1993年
- 2) 土器編年については、下記に依った。  
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1982年
- 3) 周辺調査地点7に同じ。



# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうごじょういちぼうじゅうよんちょうあと							
書名	平安京左京五条一坊十四町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-4							
編著者名	津々池惣一・高橋 潔・能芝 勉							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 ごじょういちぼう 五条一坊 じゅうよんちょうあと 十四町跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 おおみやどおりぶつこうじ 大宮通仏光寺 さがるごほうおおみや 下る五坊大宮 ちょう 町75-1他	26100		35度 00分 04秒	135度 44分 55秒	2008年4月 25日～2008 年6月4日	約170m <sup>2</sup>	マンション 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 五条一坊 十四町跡	都城跡	平安時代 ～室町時代	井戸、土坑、溝、 柱穴	土師器、土師質土器、 施釉陶器、焼締陶器、 磁器、輸入陶磁器				
		安土桃山時代 ～江戸時代	井戸、土坑	土師器、土製品、焼締 陶器、施釉陶器、磁器、 輸入陶磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-4  
平安京左京五条一坊十四町跡

発行日 2008年8月31日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961